

分娩介助実習における職業的アイデンティティ形成プロセスの 縦断的調査研究

～助産師の職業的アイデンティティ尺度を用いて～

Prospective study of process of developing professional identity
through the clinical practice on the conduct of labor
～ Using the scale to measure occupational identity in midwives ～

三谷 明美¹⁾、矢田フミエ²⁾、田中マキ子³⁾
Akemi Mitani, Fumie Yata, Makiko Tanaka

要旨

本研究の目的は、助産師学生の分娩介助を重ねる経験が助産師としてのアイデンティティ形成にどのような影響があるかの基礎資料を得ることである。A 大学助産師養成課程の学生 12 名を対象とし、分娩介助実習前、中間（5 事例終了後）、実習後（9 または 10 事例終了後）の合計 3 回「助産師の職業的アイデンティティ尺度」（5 因子、26 項目、7 件法）による縦断的調査を実施した。結果として、「助産師の職業的アイデンティティ尺度」5 因子の実習前の平均値は、第 1 因子（7 項目）「助産師として必要とされることの自負」29.2/49 点、第 2 因子（6 項目）「自己の助産師感の確立」34.6/42 点、第 3 因子（4 項目）「助産師選択への自信」19.3/28 点、第 4 因子（6 項目）「助産師の専門性への自負」20.6/42 点、第 5 因子（3 項目）「助産師としての社会貢献への志向」16.1/21 点であった。分娩介助の経験件数を重ねることによる影響として、第 2 因子「自己の助産師感の確立」において有意に低下した。下位項目では「私は助産師として、対象者に貢献していきたい」「私は助産師として対象者の願いにこたえたいと思っている」の 2 項目において有意に低下した。本研究で分娩介助実習の経験を重ねることで得点が低下していることは、様々な自己の課題が明確になることによって学生の自己効力感が低下し、助産師としてのアイデンティティ形成に揺らぎを生じさせる可能性もあり、教育的な課題として示唆された。したがって助産師学生の職業的アイデンティティ形成に分娩介助経験の影響は強く、分娩介助経過を考慮した具体的な教育的な支援方法の確立が必要であることが明らかになった。

キーワード：分娩介助実習 職業的アイデンティティ 縦断的調査

Key words : clinical practice on the conduct of labor, occupational identity, prospective study

1) 山口県立大学 別科助産専攻
2) 山口県立大学 看護栄養学部 看護学科
3) 山口県立大学大学院 健康福祉学研究科

I. はじめに

助産師教育において、全国助産師教育協議会では「助産師教育のコア内容におけるミニマム・リクワイアメンツ」¹⁾の中で専門職としての自律性を培う項目として、職業的アイデンティティ形成に関する教育内容が示されている。A大学の助産師養成課程では、1年間の助産師教育期間の中で約4ヶ月間の実習を実施し、10事例の分娩介助を実践することで助産診断と分娩介助技術および、助産師としての責任と態度を修得することを目的としている。臨地実習は、助産師の役割や要求される人間性を意識化し、自己の助産師像をイメージできるようになることから、職業的アイデンティティ形成に重要な位置をしめるものである。しかしながら、助産診断と分娩介助技術の修得に対する形成的評価はおこなっているものの、助産師学生のアイデンティティの形成に関する研究は少なく、アイデンティティ形成に向けた教育方法に関する検討は十分におこなわれていない現状の課題がある。

先行研究では、助産師としてのアイデンティティの形成に関わる要因として、助産実習の体験による肯定的感情を伴う体験と共に形成されていくこと²⁾や自己効力感や就業継続の意思の高さが職業的アイデンティティの高さに関連すること³⁾が明らかになっており、助産師としてのアイデンティティの形成に関する教育的な課題は示されているが、教育方法の検討は十分におこなわれていない。また、助産師教育における分娩介助実習の体験による助産師学生の職業的アイデンティティ形成のプロセスについて明らかになっているとはいえ、どのように形成されていくかを定量的に明らかにする必要があると考えた。

II. 目的

助産師学生の分娩介助を重ねる経験が助産師としてのアイデンティティ形成プロセスにどのような影響があるかを定量的に明らかにし、助産師教育方法の基礎資料を得る。

III. 方法

1) 研究対象

A大学助産師養成1年課程の学生12名を対象とした。

2) 研究期間

平成30年6月～平成30年11月

3) 調査方法

無記名自記式アンケート調査とし、分娩介助実習前、5事例終了後、10事例終了後の合計3回「助産師の職業的アイデンティティ尺度」による縦断的調査を実施した。なお、実習施設のうち分娩到達事例数が9例である学生については、9例終了後に調査を行った。

「助産師の職業的アイデンティティ尺度」は佐藤ら⁴⁾により開発された尺度で、信頼性・妥当性は検証されている。尺度は【助産師として必要とされることの自負】(7項目)、【自己の助産師観の確立】(6項目)、【助産師選択への自信】(4項目)【助産師の専門性への自負】(6項目)【助産師としての社会貢献への志向】(3項目)の5因子26項目で構成され、「まったくそう思わない」～「非常にそう思う」の7件法(1～7点)により回答を求めている。なお、尺度使用にあたっては開発者である佐藤氏に許諾を得ている。また、用語の定義として、「助産師のアイデンティティ」について、本研究では、「助産師の職業的アイデンティティ尺度」を用いることから、佐藤ら⁴⁾が示す「自分は助産師であるという自己同一性、助産師としての専門性をもって働くことの意味や価値の認識」とした。

また、対象者の属性として、年齢および入学前の臨床経験の有無について調査した。

5) 分析方法

統計処理は統計ソフトSPSS(Ver.22)を使用し、単純集計およびFriedman検定を用いた。有意水準は5%未満とした。

IV. 倫理的配慮

本研究に同意が得られた学生を対象に、無記名で本人がIDを設定し個人が特定されないようにした。質問紙調査には、質問紙の冒頭に、研究目的、調査に協力しなくても成績評価とは無関係であり不利益は生じないこと、データは匿名で統計的に処理を行い研究目的以外には使用しないこと、研究成果の公表について記載し、回収箱への投函をもって同意とみなした。

本研究は、山口県立大学生命倫理委員会の承認を

得て実施した（承認番号30-12号）。

V. 結果

1) 配布および回収結果

質問紙は、12名に配布し、分娩介助実習前、5事例終了後、9事例または10事例終了後ともに12名から回収した。

2) 対象者の属性

対象者の年齢の中央値は21.5歳（範囲20-43）である。入学前に臨床経験が「ない」と回答した者は9名（75%）で「ある」と回答したものは3名（25%）であった（図1）。

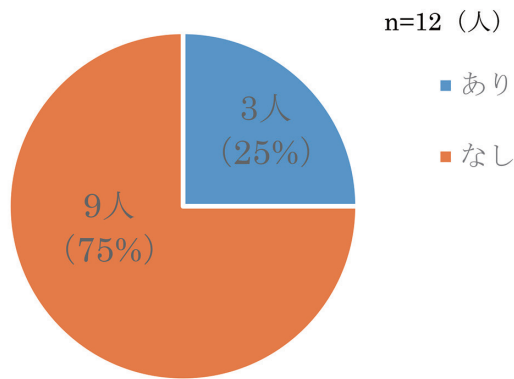


図1 臨床経験の有無

3) 助産師学生の職業アイデンティティ（実習前）

「助産師の職業的アイデンティティ尺度」5因子の実習前の平均値は、第1因子（7項目）「助産師として必要とされることの自負」29.2/49点、第2因子（6項目）「自己の助産師観の確立」34.6/42点、第3因子（4項目）「助産師選択への自信」19.3/28点、第4因子（6項目）「助産師の専門性への自負」20.6/42点、第5因子（3項目）「助産師としての社会貢献への志向」16.1/21点であった。実習前の5因子の平均得点は、先行研究（尺度開発時）⁴⁾による平均得点との比較においては同等である（図2）。

4) 分娩件数を重ねることによる助産師のアイデンティティ尺度の因子毎別縦断的变化（平均得点）

分娩介助の経験件数を重ねることによる影響として、第1因子「助産師として必要とされることの自負」、第3因子「助産師選択への自信」の2項目については実習前の得点が維持されており有意差

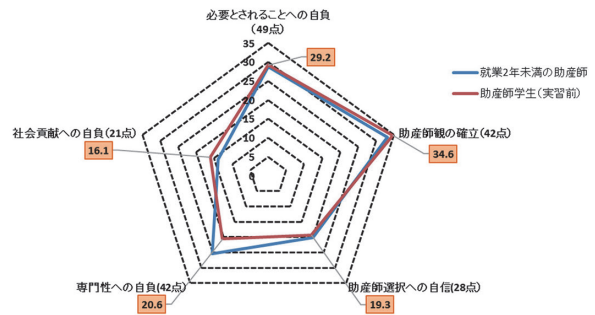


図2 助産師学生（実習前）と助産師（就業2年未満）の職業的アイデンティティの比較

は認められなかった。次に、第2因子「自己の助産師観の確立」においては有意に低下した。また、第4因子「専門性への自負」については、軽度の上昇傾向があったが有意差は認められなかった。第5因子「社会貢献への自負」の因子の得点については、有意差は認められなかったが低下傾向があった。各因子ごとの得点の縦断的变化について図3に示す。

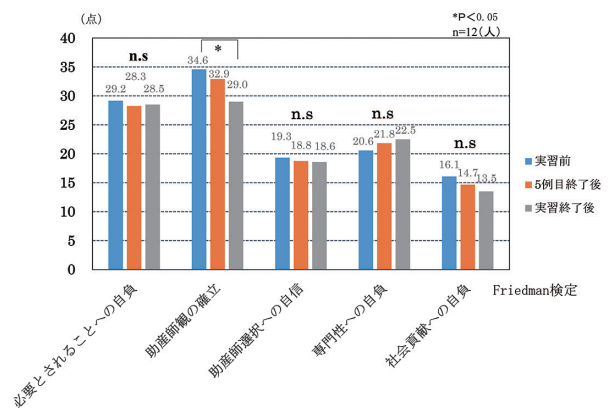


図3 助産師の職業的アイデンティティ尺度因子毎の継続的变化

5) 第2因子「助産師観の確立」の下位項目における縦断的变化

6項目全てにおいて、低下傾向が認められているが「私は、助産師として対象者に貢献したい」「私は、助産師として対象者の願いにこたえたいと思っている」の2項目においては有意に低下した(P<0.05)。「私は、助産師として対象者に貢献したい」「私は、助産師として対象者の願いにこたえたいと思っている」「私は、助産技術を自分の能力として向上させたいと思う」「自分がどんな助産をしたいかはっきりしている」「私は助産師が歴史のある仕事だと誇

りに思う」「私は助産師を選択したことはよかったと思う」の4項目では有意差は認められなかった。下位項目における得点の縦断的变化については、図4に示す(図4)。

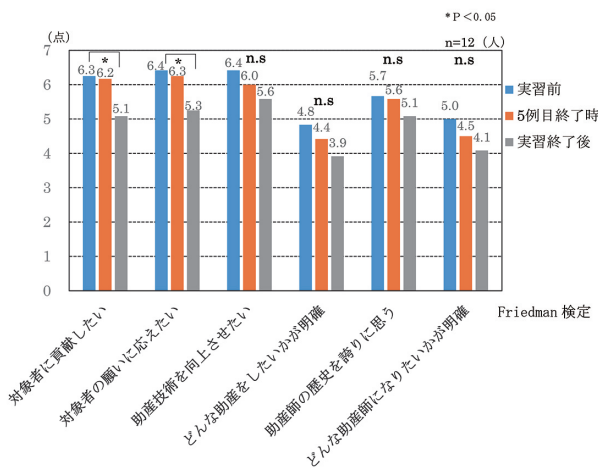


図4 自己の助産観確立(下位項目)の変化

VI. 考察

1) 助産師学生の職業アイデンティティ(実習前)の状態について

助産師学生の職業アイデンティティの状態として、尺度開発時⁴⁾の対象者である就業2年未満との平均値との比較においても、同様のパターンが認められており、助産師学生への調査で用いることが可能であることを考えた。また、学生は学内講義や演習が終了し、分娩介助実習における実践に向けた準備状況として、就業2年未満の助産師と同等であることも推察された。

2) 分娩件数を重ねることによる職業アイデンティティ得点の縦断的变化

本研究の仮説として、分娩介助実習における助産診断と分娩介助技術の到達度は、経験を重ねることで上昇し形成的に修得される傾向があり、職業的アイデンティティも同様に上昇しながら形成されていくと考えた。しかし、本研究では、分娩介助技術の修得状況とは反し、第2因子「自己の助産師観の確立」においては有意に低下した。この因子において、下位項目を検討した結果、対象者への願いに対応し、貢献できる技能の項目が低下したことについては、分娩介助実習で、毎回事例によって異なる分

娩経過や助産師の五感を使った分娩進行のアセスメントは学生の想定以上に理解が困難であるなどのリアルな経験から自己評価が厳しくなった可能性がある。また、第5因子「社会貢献への自負」においても低下傾向があったことから、対象者へのケアに対する自信のなさに対する影響があったのかもしれない。一方で「専門性への自負」の得点は維持されていることから、理想としている助産師像をもちながらも、学習途上にあり、自己の成長過程を手探りで振り返りつつ修得すべき助産ケアに向き合う現実と対峙している可能性がある。このように、学生の内面的な自己の課題が浮き彫りになったことによって、助産師としてのアイデンティティ形成に揺らぎが生じたことを考えた。先行研究では、助産学実習経験がアイデンティティ形成に影響を及ぼすことが明らかにされ、否定的な感情を肯定的な感情に好転化できるような関わりの重要性や学生時代の肯定的感情を伴う体験による「自己の助産師観の確立」への関連性^{5,6)}が指摘されており、助産学実習におけるアイデンティティ形成の支援の教育的な課題が示唆されている。本学の助産師教育においても、同様の支援は必要であるが、特に、学生は対象者が満足していく分娩体験となることを目標に実習と向き合っていることから、1事例毎の振り返りの中で、否定的な感情を肯定的な感情に好転化できるような積み重ねが重要となることが推察された。また、妊娠期から産褥期まで受け持つ継続事例の展開では、長期にわたり対象者と関わることから、対象者との関係性が構築できやすく対象者のニーズに寄り添う探求心が駆り立てられることが示唆されている⁷⁾。A大学の助産師教育においても、この科目は助産師としてのアイデンティティ形成に関わる基盤ととらえ分娩介助実習のみならず、様々な実習科目においても、同様の教育的な配慮が求められると考える。また、実習展開において、職業的アイデンティティは、自己効力感の高い学生は、困難をポジティブに受けとめることができることも示唆されており⁸⁾、明確化された自己の課題について、自己の内省を深めながら自己効力感が高まるような支援も必要である。自己効力感、遂行行動の達成、代理経験、言語的説得、情動的喚起により高められることから⁹⁾、実習環境の調整において教員の果たすべき役割は大きいことが推察される。助産師のアイデンティティ形成には教員の精神的支援の重要性が示唆されており¹⁰⁾、自己効力感を高

められるような言語的説得を意識した関わり方も必要かもしれない。

Ⅶ. 本研究の限界と課題

本研究は、対象者数12名と少なく、一般化には、限界がある。また、臨床経験の有無や実習施設の違いによる対象者の背景に関連した統制がとれていないことが課題である。職業的アイデンティティに与える影響として、様々な学習環境やその他の関連科目の実習による影響が推察されることから、今後は、対象者の背景や実習科目との関連性を含めた検討をする必要がある。

Ⅷ. 結論

本研究により、分娩介助実習の経験を重ねることによる助産師学生の職業的アイデンティティへの影響について定量的に明らかにすることによる教育的な課題が示唆された。助産学実習におけるアイデンティティ形成の支援として分娩経験に伴う課題に対応した、否定的感情を肯定的な感情に好転化できるような関わりや明確化された自己の課題について、自己の内省を深めながら自己効力感が高まるような支援の必要性が明らかになった。

なお、本論文内容に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

引用文献

- 1) 助産師教育のコア内容におけるミニマム・リクワイヤメントの項目と例示、公益社団法人 全国助産師協議会ホームページ、
http://www.zenjomid.org/activities/img/min_require_h25.pdf. (アクセス 2018.4.26)
- 2) 小泉仁子、太田奈美、宮本眞巳：学士課程の助産学生の職業アイデンティティの形成過程について—助産実習での体験に焦点を当てて—、順天堂大学医療看護学部医療看護研究、4、64-71、2008.
- 3) 中島由紀子、山内葉月：助産学教育に関する研究—助産学生の職業的アイデンティティの実態と関連要因—、保健科学研究誌、14、39-48、2014.
- 4) 佐藤美春、菱谷純子：助産師の職業的アイデン

ティティの関する要因、日本助産学会誌、25 (2)、171-180、2011.

- 5) 前掲 2)
- 6) 前掲 4)
- 7) 谷口初美、我部山キヨ子、野口ゆかり、仲道由紀：助産学実習と助産師教育の課題—学士課程助産学生の視点から—、順天堂大学医療看護学部医療看護研究、4、64-71、2008.
- 8) 前掲 3)
- 9) 坂野雄二：人間行動とセルフ・エフィカシー、セルフエフィカシーの臨床心理学、坂野雄二・前田基成編、北大路書房、2-11、2005.
- 10) 前掲 4)